

大空、死神代行の弟に  
なる！

祐氷

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

はじめまして、こんにちは（「・ω・」）

祐氷（ゆうひ）です！

戦国BASARAで連載を書き始めたばかりなのに、もう別のものに手を出してる浮気者が通ります？（?▽?）？

今回は、BLEACH×家庭教師ヒットマンREBORN!のクロスオーバーです

リボーンの主人公・沢田さわだ 綱吉つなよしが、BLEACHの世界に転生します

その後どうなるかはお楽しみ↑ツ 「ただ先を考えてないだけだろ!？」

『うん、そう(・ω・) キリッ』

……とまあ、思いついたことを衝動的に書いているのが祐水です

生暖かい目で見守ってやって下さい

注) この作品に出てくる綱吉はスレツナです! 又、転生する事で容姿がかなり変わります。ほぼオリキャラに近いです

それでもいい、と言つてくださる心の広い方は、試しに読んでみてください

# 目次

誕生、死神代行

0話	大空、死す！	1
1話	大空、生まれる！	7
2話	大空、入園する！	12
3話	大空の日常・・・？	17
4話	大空と父	23
5話	大空、駄菓子屋に会う！	
28		
6話	大空、告白する！	32
7話	大空、秘密を共有する！	
36		

# 誕生、死神代行

## 0話 大空、死す!

オレ、沢田<sup>さわだ</sup> 綱吉<sup>つなよし</sup>は物心つく前から感が良かった

道に迷っても、何となく帰り道が分かったり

無くした物を見つけるのや、探し物をする時もオレの感は役に立った

一番よくあったのは、事故がおきる前にひどい胸騒ぎがする事だ

おかげで勉強だつて要領よくこなせる程頭も良くなつたし、運動だつて何でも出来た  
何故か頻繁<sup>ひんぱん</sup>にある命の危機も乗り越える事が出来ていた

そんなオレをよく思わないヤツや、気味悪がるヤツも出て来たけど……

子供つていうのは正直なもので、嫌いだと思つたやつには徹底的に態度に出す

その親もまた然<sup>しか</sup>りだ

自分の子より出来た子供がいると、親ごと排除しようとする

証拠に一度、母さんが傷を作って帰って来たことがある

母さんは笑ってはぐらかしていたけど、オレには分かっていた

感が教えてくれていたんだ—あの傷は故意につけられたものだ

その時悟った

ああ、オレが馬鹿のフリをすればいいんだ——って

オレが、ダメツナと呼ばれるようになった日の前日の事だ

それから5年、13になったオレは本当の自分を隠したままダメツナな日々を送って  
いた

テストは毎回赤点ギリギリ、体育の授業すらまともにこなせないダメな生徒

でも実際はそうじゃない

勉強は大学卒業出来るレベルだし、母さんを守るために色んな武術に手を出して体を鍛えまくったりもした

身長はまだあんまり伸びてないけど、筋肉質だから結構重い  
鍛えてるから身軽だけどね?

そうそう、いつだったか額ひたいと両手にいきなり炎が出てきた時は慌てたなあ…

たまたま帰ってきてた父さん—母さんいわ曰く、外国を巡って石油を掘っているらしい、オレは信じてないが—とお客として来ていた父さんの上司のおじいちゃんに泣きついた記憶がある

あの炎は一体なんだったのか、その疑問が解消されたのは並盛中学校に入学して暫くした頃だった

母さんが、ポストに投函されたいたチラシを見て、家庭教師を雇ったのだ

やって来た家庭教師はとにかく型破りかつはた迷惑な奴だった

呪呪われた赤赤ん坊ん坊  
アルコバレーノなんていう、赤ん坊らしくない赤ん坊で、腕利きの殺し屋ヒットマン

しかも、オレをイタリア最大のマファイアーボンゴレファミリーのボスにするために来たなんて言う始末

最初こそ馬鹿にして笑っていたが、額にライフル（本物、直感が告げていた）を突き付けられれば信じるしかなかった

俺の平和な生活はこの時終わりを迎えていたのかもしれない

色々な事件（全部マファイア関係）に巻き込まれたり、ボスの座を巡って命懸けで戦ったり……

未来に行って世界を救ったりもした



人だつてたくさん殺した

学校のクラスメートや先輩を―たとえ俺の意思じゃなくても―同じ人殺しの道に引きずり込んで、何の力もない女の子に恐ろしい思いをさせってしまったりもした

それでも、そんな日常を受け入れて、仲間を守るために更に鍛えて  
とつくの昔にダメツナの仮面は外していた

5年後、18になったオレはボスになる事が決まっていたから、そのための準備をひたすらにこなしていた

並盛高校を卒業した日の帰り道

信号が青に変わるのを確認して渡っている時だった。唐突に、嫌な予感が胸を騒がせた

サツと周りを見渡すと、もの凄いスピードでトラックが迫ってきていた

咄嗟に一緒に帰っていた仲間たちを力任せに歩道まで投げ飛ばし（男子校生3人は流

石にキツかった)、体制を整えた瞬間――

激しい衝撃と共に、オレの身体は宙を舞った

耳を劈くつんざような悲鳴と仲間たちの悲痛な呼び声

正直、未練残りまくりだけど、オレの命は助からない――そうオレの感（一族に伝わる超直感と言うらしい）が告げていた

そして意識を手放した

頭に響いていた警告音はいつの間にか止んでいた

# 1話 大空、生まれる!

死んだ、と思った次の瞬間目が覚めた。ら、目の前に男の人の顔が迫っていた

しかも何か、唇を突き出して

まるでキスでもしそうな顔だね……って、キスされそうになってるのオレか!?

「ふぎやああああん……!?! (止めてくださいいいい……!?!)」

「おぶふうう!?!」

思わず叫びながら拳を突き出してしまったけど、今オレうまく言葉になつてなかった  
様な……??

どういう事だ、と自分の手を見ると小さな紅葉のようだった

……試しに開いたり閉じたりしてみる。きちんと動いた  
うん、これは確かにオレの手だ

オレ、転生したんだな——直感がそう言っているの、まず間違いはない…かな？

ボンゴレの直系しか持たない筈の超直感が何故今もあるのかは謎だけど（だってこの人父親だろうけど明らかにボンゴレ関係ない。直感が言ってる）、多分魂の方に刻まれているのだろうかと言う事にする

死ぬ気の炎が出せるのかは、また今度試してみよう

ある程度状況が分かると、自然と人つて落ち着くもので  
オレはあることに気づいた

今世の父である男を<sup>ひと</sup>反射的に殴り飛ばしてから状況把握が終わる今まで、周りがシン、と静まっている事に

（や、やっちゃった……!?)

殴り飛ばしたと言っても、力が足りなくて首が反るくらいだったけど…今思えばどう考えても赤ん坊の力じゃなかったよね!?

(気味悪がつて捨てられたり、最悪殺されるんじゃないや…っ!)

ああああ、どうしよおおお…:…何て内心で頭を抱えていると、男の人(まだ父と呼ぶには抵抗がある)が、凄い笑顔で隣に立っている女性(今気づいた)に話しかけた

「真咲、すごいぞ!見たか今のパンチ!この子はきつと強い漢おとしになるぞお!」  
「当然よ!…なんたって私と一心さんの子だもの!」

将来が楽しみだなあ!とはしゃぐその人につられて、真咲と呼ばれた女性も笑う

花が咲くように柔らかく笑む姿に、前世での母の姿を見た

ふうわりとしつつも、強したたかな母の姿を

そして思う。何でオレの母はこんなに緩いんだろう…:

いや、その方が助かるのかもしれないが

ふと、真咲の腕の中で何かが動いた

もぞもぞと動くソレは、どうやら自分と同じ赤ん坊のようで。オレがジツと見つめているのに気づいた母さん（こちらはすんなりと受け入れられた）が、かがんで顔を見せ  
てくれた

「ほら、君の双子のお兄ちゃんよー。…って、言ってもまだ分からないかしら？」

穏やかに紹介されて、腕の中にいる兄に視線を移す

最初に目がいったのは、つり目気味のまん丸い瞳。興味深そうにこちらを見るその目に、オレも今同じ顔をしているんだらうなどと笑ってしまう

オレが笑ったのに釣られてか、ふにやりと笑う赤ん坊に、思わず胸を射抜かれてしまった

兄だろうが関係ない。前世を含めるとオレの方がお兄さんなんだから、オレが絶対護つてあげるからね！

何から護るのか、と突つ込まれると答えられないのだが、それでも護ると心に誓ったもちろん、両親である真咲と一心、これから先生まれるかもしれない兄弟も、全部纏

めて護りたい

前世と合わせても初めての兄弟に、浮かれていたのかもしれないが、それでもオレがそう誓う気持ちに迷いは無かった

取り敢えず、少しずつ身体を鍛えるぞ…と意気込んでいる所で、母さんが言った一言に衝撃を受けた

「これからよろしくね?」護、  
「心護」

名前が、変わってる………だど!?

## 2話 大空、入園する！

「みんなー！今日から一緒にここで過ごす仲間が増えました。仲良くしてねー」  
 「はーはーいい!!」

一度死んで、生まれ変わって早2年——つまりオレが沢田さわだ 綱吉つなよしから黒崎くろさき 心護しんごになつて2年

今日は保育園の初日である

本当はもつと早くに入る予定だったらしいのだけど、色々（オレが全力で拒否したり  
 e t c . . .）あつたせいで今日までずれ込んだ

オレが保育園入りを今の今まで拒否し続けたのはワケがある

だって考えてもみて。オレって見た目は2歳児だけど、中身は前世プラス今世——つまり18プラス2＝20——で成人なんだよ!?



小さい子供（一護は別、オレの天使だからね!）の相手をするどころか、その輪の中に入るとか・・・

絶対、無理!!

前世でさえ溶け込むのに苦労したのに、これ以上はオレが耐えれそうにない

その事をオレは、前世の事も含めて洗いざらい2人にぶちまけた

全部話した結果捨てられる事になっても、仕方がないと覚悟の上でだったのだが。ぶつちやけ要らない覚悟だった

思い返せば、オレがまだ赤ん坊だった時に一度やらかして（反射的に一心さんを殴り飛ばして）いるのだ。その時には速攻で受け入れていた2人が、普通の人間なハズがなかった

母さんが超ハイスペックな靈感の持ち主ってエ・・・だからか、だから今世のオレも特殊な力を持ったまま生まれて来れたのか・・・?

2人ともまだ隠している事があるみたいだけど（オレの超直感がめっちゃ反応して

る)、とりあえずオレの諸々<sup>もろもろ</sup>全部ひつくるめて受け入れられた事がとても嬉しいので聞かない事にする。多分時期が来たら話してくれると思うから

その後の話し合いでなんと一護にも母さんの力が受け継がれていることを知り、護衛も兼ねて登園するという方向で話が決まった

それまでこつそりとしていた修行のおかげである程度は身体能力も上がったし、一護の護衛のために新しく霊力の扱いについて(どうやらオレにも霊力があつたらしい)も学ぶ必要があつたから少し時間がかかってしまった

そして冒頭に至る

オレたちは今、十数人の児童の前に立たされていた。・・・いじめではないよ!

「さあ、2人とも!みんなに2人のお名前教えてくれるかな?」

ニコニコと笑いながらオレたちの背中を押す先生に、思わず「いいとも!」と返しそうになってちよつと焦った

危ない危ない。2歳児でこの掛け合いは流石にないよ・・・

ちらりと隣に居る一護を見れば、不安そうに揺れる瞳とぶつかつた

緊張で心なしか顔が強張っている。その小さな手は、必死にオレの服を握りしめていた

ついでに言えば、オレのハートもがつつりと捉つかまれている

……よし、可愛い一護のためだ。オレが一肌脱いでやろうじゃないか!

思い返せばオレ、前世でチビ共（ランボとかイーピンとか）の世話してたんだ。子供の扱いには慣れてたや

「オレの名前は黒崎 心護だよ。こっちは一護、よろしくね!」

自己紹介はにっこり笑って元気よく。子供らしく一護に掴まれているのは反対の手を挙げてみた

とりあえず、少しでも過ごししやすいようにココの園児たちは締めとk……ゲフン、オレがまとめておくとしますかね

雲雀さんじゃなけど（笑）

P.S.

オレの真似をしてぎこちない笑みを浮かべながら手を振る一護は、それはもうとてつもなく可愛かった

一護マジ天使!!

### 3話 大空の日常・・・?

—Side 一護—

ぼくにはとつてもすごい『お兄ちゃん』がいる

ほんとうは『おとうと』なんだけど、おんなじとしだし、ぼくよりすごいから『お兄ちゃん』でいいんだ!

だけど『お兄ちゃん』ってよぶのは心の中だけにしてるの

いつもは『しんご』ってよんでるんだ

しんごはすごいんだよ!

からだの大きさもぼくとそんなにかわらないのに(でもちよつとだけしんごのほうがおつきい)、とつてもやさしいしとつてもつよい

ぼくがいつもこわいひとにおいかけられてると、かならずたすけてくれて、おいはらってくれるんだ

いまだってそう

ぼくがみんなとちがうかみのいろだからって、いじわるしてきた子たちをおこつてお

いはらつてくれた

そしてぼくのあたまをヨシヨシってなでながらぼくのかみのいろはとつてもきれいだつていつてくれる

ああ・・・やっぱり、しんごはやさしくてつよくて、かつこいい

ぼくもこんなひとになりたいなあ。そしてずっとしんごといっしょにいるの！

「しんご、ありがと。だいすきー」

—Side out—

オレ、沢田 綱吉つなよしこと黒崎 心護しんごが保育園に通いだして約1年が過ぎて、3歳になつた

初日から地道に頑張ってきた甲斐あって、ようやく保育園の園児（先生も含む）のうち約九割を掌握する事が出来た

え？どうやったかって？・・・伊達にマフィアのボス目指してないからね。察して？

とまあ、おふぎけは置いて。今は一護を探さなきゃ・・・

オレがガキ大将と話し合い（物理）してる間にどこかに行ってしまったのだ

まあ間違つても園の外には出られないし、園全体に結界を張っていて霊の類も入って来れないから心配はしていない・・・とも言切れないな

オレには敵わないけど、一護ならつて馬鹿が居るつちや居る。ので、やはり早急に見つけなければ

気配を探ればどこに居るかなんてすぐに分かるんだけど、いかんせん子供（3歳児）の体だから時間がかかっちゃうんだよね

あー、早く大人・・・とまではいかなくてもある程度大きくなりたくないなー

前世（綱吉の頃）は167cmで止まつちやつたから、今世ではせめて170cmは欲しいよね・・・ハハ

まあ・・・その話は置いて。なあんかさつきから気になる気配があるんだよね・・・それも一護のすぐ傍に。ついでにオレの超直感がそいつは敵だと告げている  
オレからしてみれば一護に大なり小なり害になる者（たまたま物も）はすべからず敵な  
んだけどネ☆

（あー居た居た・・・うわ、またあいつらかよ・・・）

ようやく見つけられたと思つたら、一護の側に居たのは昨日O☆H A☆N A☆S I☆

したばかりの悪ガキ5人のうちの3人だった

ん？残りの2人はどうしたのかって？………さつき話し合い（物理）してたの  
がその子たちだよ☆

仕方なく背中に般若か何かでも背負いながら笑顔で近づいて行く。一護を取り囲んで  
一体何をしているのやら

ある程度近づいた事で、だんだんと話し声が聞き取れるようになって来た

「………お前の髪の色だって、みんなと全然ちがうじゃん！きもちわるいんだよ！」  
「———っ!!」

あ の ガ キ ど も ……ツ!!!

全身の毛がブワリと逆立つのがわかった

あいつらは今、言ってはならない事を言った

もちろん、オレとは違ってまだ心身ともに幼い子供たちだ。言っていない事と悪い事の  
区別なんてつく筈がない、なんて事もちゃんと分っている

現に言われた本人である一護もよく分かっているようだから……

それでも、オレは我慢できなかつた



ずんずんと速足で残りの距離を進み、悪ガキたちと一護の間に割り込むと突然のオレの登場に驚いたらしく、悪ガキたちが少し後ろにのけ反った

こんなに早く見つかるとは思っていなかったのだろう。あちらこちらと視線を彷徨さまよわすがキ共を微かな殺気を込めて睨み下げる

ついでに、ニツと口角を吊り上げて相手の恐怖を上乗せしてやる

すると、どうだろう。ただでさえオレの睨みに怯えていたガキ共は、般若のような表情かおになつたオレを見てついに号泣しながら逃げて行つた

・・・あいつら、暫くは夢にでも見るんじゃないかな？ざまあww

いつそ清々しい気持ちでくると一護へと向き直れば、少し不安そうに揺れるブラウンの瞳がオレを見つめていた

うん、可愛い。・・・じゃなくて

「一護ー。お前の髪は夕日の色なんだよ。とつても綺麗な、オレの好きな色。・・・だから、あいつらが言った事は忘れてしまおうな？」

ふわふわして一護の髪を撫でながら笑うと、一護もつられてへにやりと笑ってくれた

「しんご、ありがと。だいすきー」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
もう、何なのこの子。まじエンジェル天使!!

## 4話 大空と父

オレ沢田 綱吉つなよしが、黒崎 心護しんごになって5年——そろそろこの紹介の仕方しなくても覚えてくれたのではないだろうか

オレたち兄弟が保育園に通いだして3年。∴園内の人心掌握に成功して、随分と過ごしやすくなった

只ただ、一つだけやりすぎたかなあと思うのが……

「心護様、ここに居たのですねー」

にこにこ笑みを浮かべながら近づいてくる先生。∴そう、いつの間にかオレは様付さまづけけで呼ばれるようになっていたのだ

まあ、子供たちを纏まとめあげ先生たちの補助をそれとなく熟こなしていたから、オレが普通ただの子供じゃないとバレるのは早いだろうなと思っていただけ

(…それでも5歳の子供に様付けはちよつとなあ…)  
なんて考えてる事は置いといて

「あ、せんせー!…どうしたの?」

につこりと子供らしく笑って、先生に駆け寄る。小首を傾げながら問う(この時、先生のエプロンをきゅつと握る事を忘れてはいけない)オレに、先生はほんわかとした笑顔を浮かべながら爆弾を投下した

「心護様のお父さんが、お迎えに来てるの。だから心護様だけ、お帰りの用意をしましよ  
うねー」

……オレ…だけ!?

「え?い、一護は?」

「一護君は夕方またお迎えに来るから、心配しなくても大丈夫!」

本当に2人は仲良しねー、て先生!違う、違うんだ

(オレが心配なのは一護がイジメられたりしないかどうかなんだけどおおおお!!)

そんなオレの（心の）叫びも空むなしく、帰る準備ばっちり状態なオレは一心さんと共に  
保育園を後にしたのだった

\* \* \*

「ところで一心さん、オレたち一体何処に向かっているんです？」

保育園を出てしばらく

家とは違う方向に向かっている事に気付いて尋ねると、それまで機嫌よく鼻歌を歌っていた一心さんはガクツと肩を落とした

あ……あれ？　なんか地雷踏んだ……？

（ど、どうしよう……？）

地雷を踏んだことは分かるんだけど、どれが地雷か分からな……ハッ！

「すみません、一心さん！聞いてちゃ拙ますかったですよね……！」

慌てて謝るけど、一心さんは余計に落ち込んだだけだった。……もういいや、ほつと

こう

そういえば前世の親父も、落ち込んだ時はこんな感じだったなあ…もうほんとウザかった。『父さん』って呼ばないと反応しない…し…

て、それだよ！

オレってば話せるようになってから一度も、一心さんの事『父さん』って呼んだ事ないじゃないか!! (あ、母さんは母さんって呼んでます)

そりゃ、落ち込みもするよね……。オレが父親だったらイヤだよ

(これからは父さんって呼ぶとするか…)

未だに恨みがましい目で見つめてくる一心さん…改め父さんに最上級の笑顔を向けて

「それで、これからどこに行くの？」

“父さん”

\* \* \* \*

その後、初めて父と呼ばれて有頂天になった一心が暴走して心護を担ぎ上げ、目的地へとダツシユした挙句、その店の店主を轢いた事をここに書いておいた方がいいだろう。もちろん、人様に迷惑をかけた罪で心護にボコボコにされた事も……（by 作者）

## 5話 大空、駄菓子屋に会う！

「ほんつつつとうに、申し訳ありません!!!」

片手で馬鹿親父——父さんと呼ぶのはやめた。こんなバカは親父で十分だ——の頭を床に叩き付けながら、目の前の人物に土下座する

すると、体や着物の至る所をポロポロにしたその人——浦原うらはら 喜助きすけさんは苦笑いを浮かべた口元を持つていた扇子で隠して

「いえいえ、いいんすよお。一心さんが飛び込んできた時は、一体何事かと思いましたが……」

最上級の笑顔を上乗せして、許してくれた

こんな可愛いお客サンを連れてきて下さるとは、なんて笑う浦原さんは…何というか、怪しい…の一言に尽きる



いや、いい人なんだろう……という事は何となく分かるんだけども（超直感もそんなに警戒しなくても大丈夫って言ってるし）。ただ、その纏っている雰囲気というかしている格好が怪しさを浮き彫りにしているのだ

たぶん、この人の（話し方から察せられる）性格も結構喰えないものなんじゃないだろうか。明らかに策士ですって感じだし、骸むくろとか霧属性の人たちと同じような匂いするし……

親父はこの人に会いに来たんだろうけど……一体どういう関係なんだろう？ 医者と駄菓子屋……接点が全く分からない

「ねえ、おやじ……父さん。今日は浦原さんに会いに来たの？」

「え、いま親父って言いかけなかった？」

「浦原さんは父さんとどんな関係なんですか？」

「え？ 無視？」

「そうっすねえ……お友達、という訳ではないですし……」

「浦原アシタまで!!」

む、友達ではないのか……

隣でギャーギャー言ってる親父は無視の方向で話すオレと浦原さんだけど、5歳児と大人がにこにこ笑って腹の探り合いつて……かなりシユールな光景だよ。意外と浦原さんのノリが良いのにも驚いたけど

というわけで。

「親父、このままじゃ話が進まないじゃないか。なんでオレをここに連れて来たの？」

「おや、最終的に親父に落ち着くんスね……」

「……俺、何かしたかなあ……？　ぐすん……」

親父と呼ぶのは決定事項なので、じめじめとキノコを生やしだす背中を思いつきり叩く

「痛ったあ!？」

「……………」

バシンつといい音がした背中を震わせる親父を苦笑いで見ていた浦原さんが、不意に真面目な顔つきになる。それを見てオレも親父も気を引き締めた

「さつきから気にはなっていたんすけど……」

息子さん……心ア護ナさん、一体何者なんすか?」

時間が止まった気がした

そう思ってしまったくらいには驚いた。だって、いきなり核心に迫った問いを放つとは考えてもいなかっただ

纏わすっている霊圧が僅わずかに揺れる。——揺れて、しまった

## 6話 大空、告白する！

どーも、皆さんこんにちは

急なタイミングで核心を突かれて、思わず纏つまっている霊圧を乱してしまった黒崎心護しんご 5歳です

ボス修行の時に叩き込まれたクセで表面は取り繕つくろったけど、内心はそうでもない。なぜなら、その一瞬の霊圧の乱れに浦原さんが反応したから

凄く小さな反応だったから分かりづらくはあったけど、ボンゴレの超直感ちやうちかんは伊達じゃないよね

ちらと隣に座る親父を見れば、いつになく真剣な顔で浦原さんを見つめていた

なるほど? 此処へは、この話をしに来たのか

「浦原さんも、『普通一般の人間』とは違うんですね……」

意識的に頭のスイッチをマフィアのボスへと切り替えて問えば、ガラリと変わった雰  
囲気に気付いたのだろう。浦原さんの帽子に隠された目が、スツと細められた。口元は  
いつの間にか広げられていた扇子で隠されている

……やっぱり彼は霧の性質を持っていそうだ。主に相手に感情を悟らせないよう  
に細かい工作する所とかが

まあ、そういう奴ら(例えば骸とか)も御せなかつたらボスなんかには成れないから、  
難敵ではないのだけれど

「もとという事は、貴方が何者か教えてくれると思っていいでスカ?」

もう答えは出たも同じだろうに、用心深く聞いてくる浦原さんに、オレはニツコリと

した笑みを返した

|| || || || || || || ||  
|| || || || || || || ||

一頻りオレに前世の記憶とやらがある事や、マフィアのボス候補（と  
首領）<sup>ボス</sup> だった事を話すと、案の定2人とも難しい顔で固まっていた

浦原さんとはかく親父まで固まってるのは、オレがマフィア関係だったという事を  
隠していたからだろう

前回話した時は前世の記憶があるとしか話してなかったから

………流石に、もう受け入れられないかなあ……

最悪、殺される事を覚悟しつつ2人の反応を待つ

最初に口を開いたのは親父だった

「心護、お前が今何を考えているのか分からんが、これだけははっきり伝えておく」

親父はそこまで言っただけで一度口を噤むと、オレの目を射貫くように見つめてきた

「お前は、俺と母さんの——俺達の息子だぞ。例え、前世の記憶が有ろうとな」

前にもそう言っただろう?と苦笑している親父を俺は最後まで見れなかった

ただただ、涙が溢れそうになるのを堪えるのに必死だった。流石に、マフィアだった事まで受け入れてくれるとは思ってなかったから……

結局、泣いちゃったんだけどね?

## 7話 大空、秘密を共有する！

(精神的には) 年甲斐も無く泣いてしまった黒崎

心護しんご

5歳です

改めて親父に受け入れてもらえたオレだけど、問題はまだ一つも解決してはいないんだよね

「重ね重ね、お見苦しい所を……すみません」

泣きはらした後の、少し腫れているだろう顔を隠す為もあるけど、再び頭を下げたオレを見る浦原さんの目がどうにも生暖かい

なんだろう……まさか無害認定されたとか？



「アナタが前の世でどの様な立場に在ったかというのは、この際置いておきましょう。

これでもかなり長生きしていますので、見る目には自信がありませんか？  
アナタとはいい関係でいられそうだ」

まさかだった

やはり包み隠すことなく、ありのままをさらけ出した事が良かったのだろうか、正直  
泣いたのは誤算だった

ああ、これは家庭教師リポーションに知られたら相当なお叱りを受けるだろうなあ……

まぶか  
目深まぶかに被った帽子から覗く、つぶらな瞳が嗜虐的に光るのを想像して思わず苦笑が浮  
かぶ

「それで、オレのことは話しました。貴方は？」

小首を傾かしげて問いかけたオレに答えたのは、目の前に居る浦原さん――

ではなく

「それについては、まず父さんの事を話さないとな」

横に座る、親父だった

|| || || || || || ||

|| || || || || || ||

「お……親父が元死神いいいいっ!？」

前々から、何か隠してるのは分かっていたけど!

親父が元は人間じゃなかったなんて、さすがのオレでも判らねえよ!？」

前世も含めて数年ぶりに叫んだせいで、肩で息をするオレに親父が心配そうな目を向けてくる

因みに親父の言った事を疑いもしない理由は簡単で、超直感が『偽りナシ』と告げているからだ

そして、これまでの話の流れで何となく察してしまった事がある

「浦原さんも、死神——なんですネ」

疑問形ではなくほぼ確定な聞き方をするオレに、浦原さんはまた帽子に隠れて見えづらい目を細めた

——のは一瞬で、ニツコリと笑みを浮かべた浦原さんは口元を隠していた扇子をひらひらと振りながら口を開く

「そうでスネー。……詳しくは省きますが、確かにアタシは死神で間違いないですよ」

今はしががない駄菓子屋ですが、なんて嘯く浦原さんに、こつちもそれ以上踏み込むことは止めておく

無理に聞かなくても、時期に分かる事のような気がするからソレが何時いつになるのかは分からないけどね

その後もイロイロ（親父と浦原さんの付き合い出した大まかな経緯とかの）話しを聞いて、浦原さんと少しは仲良くなれたかな？という所で帰る時間になった

と言うか一護のお迎えの時間なだけなんだけど

「親父！早くはやく！一護が寂しがつちやうでしょ!？」

未だに浦原さんと話し込んでいる親父を急かし、浦原商店を出たオレは愛しい一護の元へと全速力で走り出した

——待っててね一護！お兄ちゃんがすぐ行くよー……!!

「いや、心護……お前は弟だろ？」  
「親父は黙ってて!!」